

『日中友好岸関子賞』論文募集要項

(公財)日中友好会館は『日中友好岸関子賞』を設立し、毎年一回日本の大学あるいは研究機関の修士課程で学んだ中国人留学生の修士論文の中から優秀論文2点を選考し、表彰、奨励金(20万円)を授与しています。

主催ー「第3回日中友好岸関子賞」審査委員会

論文応募の詳細は以下のとおりです。

- (1) 募集対象ー中華人民共和国東北三省(遼寧省・吉林省・黒龍省)からの留学生に限る。
- (2) 各年度末において日本の大学の修士論文学位審査に合格した人文社会科学系の論文を対象とする。
- (3) 提出するもの(以下は返却しません)
 - 論文コピー1部
 - 1500字以内の要約
 - 指導教官推薦状
 - パスポートコピー(東北三省出身がわかるページ)
 - 在留カードコピー
 - 住所、連絡先携帯番号
- (4) 郵送先。

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-5-3
(公財)日中友好会館 『日中友好岸関子賞』係
- (5) 問い合わせ先

担当:(公財)日中友好会館 鈴木、沼崎
Tel 03-3814-1261 Fax 03-3814-8383
- (6) 締め切りー2015年4月30日 (当日消印有効)
- (7) 発表ー○第1次選考ー2015年9月 ○最終選考ー2015年10月
- (8) 表彰式ー2015年11月(予定)

以 上

『日中友好岸関子賞』について

このたび日中友好会館に『日中友好岸関子賞』を創設することになった。これは、日本と中国の人々との友好を心から願いながら激動の時代を生き抜いた一人の女性の願いを形にしたものである。



岸関子は、日露戦争後に中国大陆に渡った実業家の娘に生まれ、奉天(現在の瀋陽)で育った。浪速女学校で学んでいたころから、学問好きの父が北京から招いた中国人の学者に、兄や弟とともに中国語、中国の古典、書道を学んだ。乗馬の好きなお転婆娘はやがて岸要五郎と結婚する。夫は「五族協和」の夢を追って、大学卒業後、大同学院第一期生として満州に渡り「満州国」の行政官となった青年であった。夫とともに満州の僻地を回るうちに、彼女も「五族協和」の実態に触れることになる。やがて「満州国」は崩壊し、夫は敗戦の混乱の中で悲劇の死を遂げた。幼い三人の娘を連れて日本に引き揚げて来た関子は、外務省アジア局の職員として働き、のちには日本と香港の合作映画の通訳・翻訳をしたりして三人の娘を育て上げた。

娘たちは母の教育によって正しい歴史認識を持つようになり、中国に親しんでいった。長女は中国文学研究者となり、早稲田大学で教鞭を執る。次女は実業家として中国とかかわり、三女はやはり中国文学研究者として桜美林大学で教鞭を執った。母としての彼女が娘たちに望んだのは、女性が自立することと、父の志を継いで、なんらかの形で中国との友好交流に寄与することであった。

娘たちに望んだだけでなく、みずからも留学生を自宅に預かったり、北京友誼賓館の料理人に日本料理を教え、さらには、日本の味を知ってもらうために自費で日本に招いたりした。なんといっても彼女の大きな貢献は、廖承志氏の要望に応じて「文革」直後、北京飯店の料理人たちに日本料理を基礎から教え、同ホテルの二階に正式に日本料理店を開店させたことである。

90歳を過ぎてからも娘たち一家とともにしばしば北京を訪れ、中国の人々から「姥姥」と呼ばれて慕われた。

2006年3月、桜の満開の季節に97歳の生涯を終えたが、このたび、彼女が残したささやかな預金を、中国東北部(旧満州)からの留学生に「姥姥のご褒美」として差し上げたいという遺族の願いに応じて、一人の女性の日中友好の志を伝えるために、日中友好会館に『日中友好岸関子賞』を創設したしだいである。

◆第二回「日中友好岸関子賞」授賞式を終えて



受賞者の楊さん（前左1）と李さん（前右2）

さる12月6日、日中友好会館において、「第二回日中友好岸関子賞」の授賞式が、審査員をはじめ関係者の列席のもとにとりおこなわれた。

この賞は、かつて「五族協和」を夢見て「満洲国」に渡り、敗戦後非業の死を遂げた日本人官僚の妻として激動の歴史を生き抜き、若い世代に「日中友好」の大切さを伝えようとした一人の女性の志を継ぐために設立されたものである。毎年、中国の東北地方から日本に留学して大学院で学ぶ留学生の修士論文の中から、公募によってすぐれたものを二篇選んで表彰し、副賞20万円を贈呈する。審査員はその「志」に共感する次の方々である。

○審査委員長

西原春男（早稲田大学名誉教授・元総長）

○審査委員

山田辰雄（慶応大学名誉教授）

小島麗逸（大東文化大学名誉教授）

劉建輝（国際日本文化研究センター教授）

斎藤泰治（早稲田大学教授）

岸陽子（早稲田大学名誉教授）

村上立躬（日中友好会館顧問・前理事長）

武田勝年（日中友好会館理事長）

応募論文は本年も力作が揃っていたが、二回の審査を経て、つぎの二点が選ばれた。

○楊金娣〔女〕

（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）

『非情城市』に隠されている女性の声と

脱コロニアルの記憶——音声分析を中心に」

○李思齊〔男〕

（一橋大学大学院言語社会研究科）

「字音接尾辞「的」についての一考察

——前接語基及び中国語対訳表現を通して」

前者は、映画「非情城市」の食事場面を中心とするさまざまな「音声分析」を通して当時の状況と女性ジェンダーを析出した、ユニークな方法が評価された。後者は、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を駆使して、日中両言語の比較を踏まえた接尾辞「的」による造語法の構造分析という先行研究の手薄な分野を切り拓いたことが評価された。

受賞者はいずれも博士課程に進学して研究を継続しており、日中の相互理解を深めるために将来大きな役割を果たすことが期待される。（岸陽子）

◆新入寮生懇親会

木枯らし吹く師走の12月15日、本館大ホールにて新入寮生懇親会を行いました。本会は年に2回行っている後楽寮の年間行事の一つで、昨年6月から11月までに入寮した寮生が対象です。研究や授業のため、やむなく出席できなかった寮生もいましたが、当日は46名が参加しました。

まず、武田勝年理事長と王昆中国代表理事より歓迎のご挨拶をいただき、その後、寮生委員会の梁英宗委員長から、日本で暮らす上で必要な「あいさつ」「マナー」「思いやり」についてのお話がありました。続いて、参加寮生が一人ずつ順番に日本語や英語で自己紹介をしました。大変流暢な話し方からは、留学生活への夢や期待が伝わってきました。